

第10回 校長会議あいさつ

R.6.1.5 稲垣

明けましておめでとうございます。本年も西尾市の子どもたちのために、ご尽力くださいますようお願いいたします。市教委としても学校を全力で支援してまいります。

正月2日、「江戸からきたキラくん」を楽しく観ました。テレビ画面に地元の風物が映るたびに、なぜか嬉しくなってしまう。吉良さん愛と西尾愛の詰まったほのぼのとしたドラマでした。

昨年12月14日には、花蔵寺にて恒例の吉良上野介義央公の毎歳忌法要がありました。「仮名手本忠臣蔵」は、敢えて一言で言うなら大衆向けのフィクションだったのですが、巷間、吉良さんはすっかり悪者にされてしまいました。今では忠臣蔵の知名度も低下し、子どもたちは気に留めていないかもしれません。しかし、40年ほど前、私が吉良中学校で務めた当時は、個人的には濡れ衣とは知っていたものの、私も生徒たちも対外試合等で少し引け目を感じた憶えがあります。史実を紐解けば、たいへん立派なお殿様でした。洪水に苦しむ領民のために堤防を築いたり、困窮する生活を救うために新田開発や塩田を作ったりした名君でありました。これについては、いずれ市教委として公式見解を示したいと考えています。

本日は、佐久島しおさい学校についてお話しします。

「・・・佐久島は、ここ10年、いや5年のうちに一つの大きな転換点に立たされると思う。ちょっとオーバーに言えば、将来佐久島が無人島になるか、それとも何らかの手を打って、例えば観光地化とか漁業形態を変えるとかして生き延びるという選択肢を迫られると言い換えてもいい。」

これは、平成の初め、当時の佐久島観光協会青年部のリーダーが語った言葉です。彼は、このままだと30年後、佐久島が無人島になるのは避けようがないと危機感をあらわにしていました。それから35年、島の人たちの努力は、並大抵のものではありませんでした。そして現在、人口は4割ほどになってしまいましたが、佐久島は、年間十万人が訪れる観光の島として、今も奮闘を続けています。教育委員会としても、このような島の思いに応えるべく、人事配置の工夫や小規模特認校制度の活用、義務教育学校とするなど、佐久島しおさい学校の運営を支援してきました。

また、佐久島しおさい学校では「学校は島の未来の生命線である」という自覚をもって、豊かな

地域教材や少人数学級を生かした、島ならではの教育に邁進しています。佐久島が存続していくために、学校は何ができるのか。どうあるべきか。学校が島という地域に信頼され、愛されることは言うまでもありませんが、島への定住者を増やしていくことに少しでも協力できないかという命題にも向き合うことにしました。今まで島に働き口が少ないことが過疎化の重大な要因だったのですが、幸い世の中はリモートワークの時代を迎えつつあります。家族ぐるみでの移住を考えられたとき、島でのゆったりとした生活に加えて、学校が魅力的であれば、佐久島を選んでくれる可能性が高まるのではないかと考えたゆえです。

「過疎に苦しむ村さえ見捨てず、愛し、育て得るような主体性をもった学力なら、進学や就職だって乗り越えるだろう。」かの東井義雄先生の「村を育てる学力」の一節です。佐久島しおさい学校も同じ思いで授業をつくっています。佐久島しおさい学校には、島の子も陸から船で通ってくる子もいますが、「島を育てる学力」すなわち子どもが未来を拓くことのできる学力を身につけさせるべく尽力しています。東井義雄先生の理念は、佐久島しおさい学校のみならず、市内全校が共有すべき教育実践の不易の姿勢であることを、新しい年のスタートにあたり、確かめておきたいと思います。